

被虐待児に寄り添う支援とはなにか ——自立援助ホーム職員の被虐待児に対する 寄り添い尺度作成の試み——

横山 絵麻 早稲田大学 江原 稔 琉球大学
松葉 百合香 飯島 有哉¹ 桂川 泰典 早稲田大学

What constitutes close support for abused children?

The development of a Closeness Support Scale for abused children by employees of self-support homes

Ema YOKOYAMA (*Waseda University*), Minoru EHARA (*University of the Ryukyus*),
Yurika MATSUBA, Yuya IJIMA¹, and Taisuke KATSURAGAWA (*Waseda University*)

The purpose of this study was to develop measurement of a closeness of employees of the self-support home and to confirm its reliability and validity. In Study 1, items were developed based on an extensive literature review and responses to open-ended questions. In Study 2, exploratory factor analysis indicated 26-item questionnaire, and the result showed factor pattern. “Experiencing support visually”, “Sharing feelings and time”, “Supporting children awareness”, “Understanding children as an ally”. This scale has sufficient internal consistency and factorial validity and determined to measure closeness support. However, more refinement is needed concerning construct validity and test-retest reliability. In the future, to clarify the support that will show up more clearly on the scale, and it is necessary to confirm usefulness of this scale by increasing the sample size.

Key words: self-support home, close support, child abuse

Waseda Journal of Clinical Psychology

2019, Vol. 19, No. 1, pp. 83 - 91

自立援助ホームは、保護者の適切な養育を得られず義務教育を終えた15歳から20歳未満の子どもや若者（以下、子ども）を主な対象に社会的養護を行う施設である。

現在、わが国には約45,000人の社会的養護児童が暮らしており、その多くが保護者らによる被虐待経験を持っている（厚生労働省, 2015a）。自立援助ホーム入所児童の調査においても、376人のうち65.7%が被虐待経験を有しており（厚生労働省, 2015b）、多くの虐待を受けた子どもが生活しているという点が自立援助ホームの特徴といえる。虐待を受けた子どもの特徴として、周囲に対して不信任感や恐怖感が強い（増沢, 2009）、言語理解や伝える能力が低いなどの困難感（高橋, 2013）、性的問題行動が内外に表出する（八木・岡本, 2012）ことがあげられる。また、高橋（2010）は、

自尊心の低下、他者への不信任感などに加え、被虐待体験が暴力や援助交際などの問題行動に発展することを示している。

しかし、村井・小林（2002）は、自立援助ホームの子どもが人間関係に問題行動を引き起こすのは、虐待などによる劣悪な生育歴や家庭環境から、各発達段階の発達課題が克服されないままに青年期前期を迎えたことによる環境要因が大きいとしている。ゆえに、職員は、発達課題の困難さを抱えた背景を踏まえて子どもとの信頼関係を形成すること、子どもの心の傷を回復させる支援が求められる（村井・小林, 2002）。

自立援助ホームの子どもは、入所から退所までの平均在所期間はわずか9ヶ月であり（厚生労働省, 2015b）、大半が就業している。この間、虐待を受けた子どもと生活をともにする職員は、子どもの複雑な心理的および社会的背景を理解しつつ、支持的かつ受容的な支援にあたる。とりわけ、子どもをありのまま受けとめ、支援の基本となる寄り添いの専門家としての

¹ 日本学術振興会特別研究員（Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science）

立ち位置が重要であるといわれている（厚生労働省，2015a）。

先行研究において，村井・小林（2002）は，自立援助ホームにおける自立を主体性の保障であると述べている。この主体性の保障とは，子どもから主体性を引き出す段階において，子どもたちの抱えている困難，気持ち，価値観をありのまま受けとめ，子どもたちに寄り添うことであると述べている。また，支援者の立場として子どもの気持ちに寄り添うことを第1にすべき（高橋・早川・大森，2015），子どもたちに寄り添うことに意味がある（自立援助ホームハンドブック製作実行委員会，2013）など，多様な支援の中でも寄り添うことの重要性が数多く指摘されている。

しかし，自立援助ホームや社会的養護の領域において，寄り添うことの重要性が指摘されるものの，定義および具体的な内容はいまだ不明確のままであり，実証的な研究も十分ではない。また，全国自立援助ホーム実態調査によると，職員の半数が勤続年数3年未満と定着率が低い中，経験の少ない職員が子どもへの支援に奮闘していると報告されている（全国自立援助ホーム協議会，2016）。これらの現状をかんがみ，自立援助ホーム職員の支援において，寄り添いを具体化することは現場の職員にとって支援の指針となりえる。

そこで，本研究では，自立援助ホーム職員の支援の基本である寄り添いに着目し，自立援助ホームの多くを占める虐待を受けた子どもに対する「寄り添う支援」とはなにかを検討し，構成要素を明らかにすることを目的とした。

本研究によって「寄り添う支援」の構成要素が明らかとなり，尺度作成を試みることは，「寄り添う支援」を考えるうえでの基礎資料および指針となることが考えられる。

研究 1

本研究では，自立援助ホームにおける虐待を受けた子どもに対する「寄り添う支援」の構成要素を探索的に調査し，職員の寄り添いに関する尺度の項目原案を作成することを目的とした。

方 法

調査協力者

首都圏53ヶ所の自立援助ホームに在籍する20歳以上の常勤職員，月に20時間以上勤務する非常勤職員，月に20時間以上子どもと関わるボランティアを含めたスタッフ，計33名を対象とした。調査協力者の概要はTable 1に示した通りである。

Table 1
調査協力者の概要

| | | N | % |
|---|-----------------------------|----|------|
| 性 別 | 男性 | 19 | 57.6 |
| | 女性 | 14 | 42.4 |
| 年 齢 Mean (± SD) = 40.7 (± 12.4) | 20歳代 | 7 | 21.2 |
| | 30歳代 | 9 | 27.3 |
| | 40歳代 | 9 | 27.3 |
| | 50歳代 | 4 | 12.1 |
| | 60歳代 | 4 | 12.1 |
| | 70歳以上 | 0 | 0.0 |
| 勤続年数 Mean (± SD) = 5.9 (± 4.1) | 1年未満 | 3 | 9.1 |
| | 1年以上3年未満 | 8 | 24.2 |
| | 3年以上5年未満 | 6 | 18.2 |
| | 5年以上10年未満 | 12 | 36.4 |
| | 10年以上15年未満 | 3 | 9.1 |
| | 15年以上20年未満 | 1 | 3.0 |
| | 20年以上 | 0 | 0.0 |
| 勤務形態 | 常勤職員 | 31 | 93.9 |
| | 非常勤職員 | 2 | 6.1 |
| 役 職 | ホーム長または準ずる役職 （直接処遇を伴う） | 18 | 54.5 |
| | ホーム長または準ずる役職 （直接処遇を伴わない） | 0 | 0.0 |
| | 直接処遇職員 | 15 | 45.5 |
| | その他 | 0 | 0.0 |
| 保有資格 （複数回答） | 児童指導員 | 15 | 45.5 |
| | 保育士 | 6 | 18.2 |
| | 教員免許 | 14 | 42.4 |
| | 社会福祉士 | 10 | 30.3 |
| | 臨床心理士 | 1 | 3.0 |
| | その他の心理士資格 | 1 | 3.0 |
| | 特に資格はない | 1 | 3.0 |
| | その他 | 10 | 30.3 |

調査時期および調査手続き

2017年7月にインターネット調査法による質問紙調査を行い，Google フォームにて回答を求めた。

なお，特性上，連絡先を秘匿としている自立援助ホームに配慮し，調査対象者の募集と告知は全国自立援助ホーム協議会を通じて，メールによる一斉配信を行った。

調査内容

子どものデモグラフィックデータ 質問項目の教示文は「あなたが，よく知っている虐待を受けたお子さんのうち，『寄り添う支援』という言葉から連想されるお子さんを1名，思い浮かべてください。よく思い浮かべることができれば，現在ホームに暮らしているお子さん，過去に暮らしていたお子さんのいずれかは問いません」とした。

デモグラフィックデータでは，子どもの性別，子どもの入所時もしくは出会った当時の年齢，子どもの受けた（と思われる）主たる虐待の種類，子どもの受け

た（と思われる）その他の虐待の種類の回答を求めた。自由記述質問では、「そのお子さんの特徴（言動、態度、表情、人との関わり方など）について、気になったところがあれば具体的に教えてください」（以下、1: 虐待を受けた子どもの特徴）とたずねた。

職員の「寄り添う支援」に関する自由記述質問 質問項目の教示文は「引き続き、同じお子さんについてお考えください」とした。

自由記述質問として、「あなたが、そのお子さんに行った支援のうち『寄り添い』にあてはまると思う行動、言葉かけ、気持ちなどの具体的な内容あるいはエピソードを教えてください」（以下、2: 職員の「寄り添う支援」）、「あなたの寄り添う支援によって、そのお子さんの変化を感じた部分の具体的な内容あるいはエピソードを教えてください」（以下、3: 子どもの変化）、「そのお子さんへの支援、あるいは印象深いお子さんたちへの支援を振り返り、あなたにとって『寄り添うとはなにか』教えてください」（以下、4: 寄り添うとはなにか）について回答を求めた。なお、4: 寄り添うとはなにか、をたずねる質問は複数回答とし、3つまで回答欄を設けた。

職員のデモグラフィックデータ 性別、年齢、勤続年数、勤務形態、役職、保有資格についてたずねた。

分析方法

回答を得られた自由記述質問について、1枚につき1件の内容を記述したカードを作成した。類似した内容はKJ法（川喜田, 1967）を援用して、第1著者と臨床心理学を専攻する大学院生2名を協同分析者として計3名で整理・分類を行った。

尺度項目原案の作成

専門家による内容的妥当性の検討 自由記述質問の分類結果について、児童福祉を専門とする大学教員、自立援助ホーム長兼全国自立援助ホーム協議会事務局長の計2名に内容的妥当性の検討を依頼した。依頼した時期は、KJ法の援用による分類後に1回と、尺度項目原案作成後に1回の計2回とした。1回目のKJ法の援用による分類後に依頼した内容は、カテゴリ名が適切に分類した項目を反映しているか、および、カテゴリ内で適切でない項目はあるか、に関する評価であった。2回目の尺度項目原案作成後に依頼した内容は、教示文は適切であるか、および、質問項目は「寄り添う支援」を適切に反映した文言となっているかについて、第1著者と協議をしながら質問紙に評価をしてもらうことであった。

評価様式は、「1. 十分反映している（1点）」、「2. 反映している（2点）」、「3. あまり反映していない（3点）」、「4. 反映していない（4点）」の4件法とした。評価者のどちらか一方のつけた得点が3点以上、両者の合計

得点が6点以上の項目は適切性に乏しいとして削除した。また、疑義のついた項目は内容の見直しや削除の他、評価者が足りないと思う項目の追加を行った。

尺度項目原案の作成 最終的な尺度項目原案の作成は、内容的妥当性の結果をふまえ、第1著者と臨床心理学を専門とする大学教員（第5著者）と協議のうえを行った。主な質問項目は、寄り添いについてたずねた自由記述質問から検討した。

倫理的配慮

本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2017-052）。また、質問紙調査の際、メールおよびGoogleフォームにて、本研究の目的、倫理的配慮、データの取扱いなどの注意事項を記載し、同意を確認したのちに回答を求めた。

結果

KJ法の援用によって得られた分類の結果、自由記述質問から得られたラベルの数は合計396項目、虐待を受けた子どもの特徴に関する136項目、職員の「寄り添う支援」に関する86項目、児童の変化に関する76項目、寄り添うとはなにかに関する98項目であった。

虐待を受けた子どもの特徴に関する自由記述の分析 職員からみた虐待を受けた子どもの特徴（言動、態度、表情、人との関わり方など）について分類した結果、虐待を受けた子どもの特徴は《外見》、《他者への意識や態度》など、5つの大カテゴリーに分類された（Table 2）。

Table 2
虐待を受けた子どもの特徴 分類結果

| 大カテゴリー | 中カテゴリー | 小カテゴリー例 |
|-----------|-----------|----------------------|
| 外見 | 服装や化粧 | 派手な外見、幼い印象、マスクの着用 |
| | 表情 | 表情が乏しい、表情がぎこちない |
| | 声 | 声が興奮のサイン |
| 他者への意識や態度 | 他者に対して不器用 | 他者との関わりが希薄、人を見ない |
| | 他者を気にする | 他者を気にする、流されやすい性格 |
| | 他者への愛着 | 試し行動、特定の大人にべったり |
| | 他者への執着 | 他者への執着が強い、親の価値観に囚われる |
| | 被害体験 | DV体験 |
| ポジティブ要素 | 自己肯定感 | 自己肯定感がある |
| | 健康的な側面 | 明るくフレンドリー、優しくてまじめ |
| | 無気力・不安感 | 投げやり・無気力、マイナス思考、不安感 |
| | 不自信 | 他者への不自信、子どもだけつるむ |
| | 自尊心が低い | 自尊心や自己肯定感が低い、自信がない |
| ネガティブ要素 | 虚勢 | 虚勢を張る |
| | 自己中心的 | 人によって態度が違う、自己中心的 |
| | 怒り・暴言 | 怒りや不満、言葉の攻撃、暴言、人との衝突 |
| | 虚言や作話 | 嘘をつく、記憶があいまい |
| | 自傷行為 | 体の外側・体の内側への自傷行為 |
| 問題行動 | 希死念慮 | 希死念慮 |
| | 生活の乱れ | 睡眠の問題、援助交際や売春、ルール違反 |
| | 対象への依存 | 他者への依存、恋愛や性の依存 |

職員の寄り添う支援に関する自由記述の分析 職員が行った支援のうち、「寄り添い」にあてはまると思う行動、言葉かけ、気持ちについて分類した結果、職員の「寄り添う支援」として、《あたたかみのある家庭的な支援》、《ありのままを受け入れる支援》の2つの大カテゴリーに分類された (Table 3)。

Table 3
職員の「寄り添う支援」 分類結果

| 大カテゴリー | 中カテゴリー | 小カテゴリー例 |
|----------------|-----------------|----------------------------|
| あたたかみのある家庭的な支援 | 気持ちと時間の共有 | 楽しい時間の共有、日々の積み重ね |
| | 子どもとの心理的距離 | 適切な心理的距離、関係を切らない |
| ありのままを受け入れる支援 | 長期・継続的な支援 | 家族のように接する、退所後の生活援助 |
| | 話の聞き方 | 子どもの立場から聞く、否定せずに聞く |
| | 子どもの特性や考えの受け入れ方 | 子どもの特性を理解する、否定しない、感情的にならない |
| | 気づきを支える | 一緒に考える、新しい視点を与える |

子どもの変化に関する自由記述の分析 職員の「寄り添う支援」によって、子どもの変化を感じられた部分について分類した結果、子どもの変化として、《他者への安心と信頼》、《外見と内面の変化》など、5つの大カテゴリーに分類された (Table 4)。

Table 4
子どもの変化 分類結果

| 大カテゴリー | 中カテゴリー | 小カテゴリー例 |
|-----------|-------------|------------------|
| 他者への安心と信頼 | 安心と信頼 | 安心と信頼、甘えるようになった |
| | 他者への信頼感 | 他者の受け入れ、他者から学ぶ |
| | 助けを求める | 助けを求める (入所中・退所後) |
| 外見と内面の変化 | 全体・外見・内面の変化 | 外見の変化、精神的な落ち着き |
| 問題行動の改善 | 言動の変化 | 自傷行為に対する変化 |
| | 精神的自立への芽生え | 客観性の向上、将来への意識 |
| 自立に向けた意識 | 経済・社会的な自立 | 経済的な自立、社会的な自立 |
| 変化なし | 変化はない・わからない | 変化はない・わからない |

寄り添うとはなにかに関する自由記述の分析 職員にとって寄り添うとはなにかについて分類した結果、《ありのままの理解》、《安心できる味方としての存在》など、3つの大カテゴリーに分類された (Table 5)。

Table 5
寄り添うとはなにか 分類結果

| 大カテゴリー | 中カテゴリー | 小カテゴリー例 |
|---------------|------------|------------------|
| ありのままの理解 | 安定した対応 | 安定した対応 |
| | 職員間のチーム意識 | 職員間のチーム意識 |
| | ありのまま受け入れる | 受け入れる、傾聴、否定しない |
| | 共感と理解 | 共感、想像、内面の理解 |
| | 環境と特性の理解 | 環境への理解、特性への理解 |
| | 感謝 | 感謝 |
| 安心できる味方としての存在 | 安心できる存在 | 味方として安心できる存在、安心感 |
| | 子どもを見守る | 時間と空間の共有、失敗をゆるす |
| | 子どもとの距離 | そばにいる、適切な心理的距離 |
| | 子どもとの位置 | 目線、立場、向き合う |
| 子どもに必要な支援の継続 | 課題を見つける | 課題を一緒に考える、社会的資源 |
| | 継続的な支援 | つきあい続ける |

寄り添う支援の定義 寄り添うとはなにかについて分類した結果から、自立援助ホーム職員における「寄り添う支援」とは、あたたかみのある家庭的な関わりの中で子どもをありのまま理解し、安心できる味方として存在しながら必要な支援をし続けることであると定義した。

虐待を受けた子どもの概要 得られた回答は33件、この結果から、33名中30名の子どもが複合的虐待を経験していることが示された (Table 6)。

Table 6
虐待を受けた子どもの概要

| 子どもの属性 | | N | % |
|---------------------|-------|----|------|
| 性 別 | 男性 | 12 | 36.4 |
| | 女性 | 21 | 63.6 |
| 年 齢 | 15歳 | 2 | 6.1 |
| | 16歳 | 10 | 30.3 |
| | 17歳 | 12 | 36.4 |
| | 18歳 | 7 | 21.2 |
| | 19歳 | 1 | 3.0 |
| | 20歳 | 0 | 0.0 |
| | 21歳以上 | 1 | 3.0 |
| 主たる虐待の種類 | 身体的虐待 | 6 | 18.2 |
| | 性的虐待 | 6 | 18.2 |
| | ネグレクト | 9 | 27.3 |
| | 心理的虐待 | 12 | 36.4 |
| その他に受けた虐待の種類 (複数回答) | 身体的虐待 | 13 | 39.4 |
| | 性的虐待 | 6 | 18.2 |
| | ネグレクト | 18 | 54.5 |
| | 心理的虐待 | 17 | 51.5 |

考 察

本研究の目的は、自立援助ホーム職員における被虐待経験のある青年期前期の子どもに「寄り添う支援」の構成要素を探索的に調査し、職員の寄り添いに関する尺度項目原案を作成することであった。KJ法の援用による分類結果によると、虐待を受けた子どもの特徴として、《外見》、《他者への意識や態度》などの特徴が職員によってとらえられていた。《外見》に含まれる「派手な服装を好む」、「男性が居ても構わず胸元が開いている服を着る」などは、八木・岡本 (2012) が指摘する児童福祉施設でみられる性的問題行動にみられる露出の多い服装をすることと一致した。また、「表情が乏しい」ことについて増沢 (2009) は、虐待による恐怖から解離を起こすためと指摘している。このことから、虐待の特徴は外見にも少なからずあらわれていると考えられる。《他者への意識や態度》であるが、対人関係における特徴は、増沢 (2009) の指摘する周囲に対して不信任や恐怖感が強いあらわれだと考えられる。

また、以上の分類結果は、子どもが青年期前期を迎えるまでの発達課題を未達成のまま成長したことによる困難さのあらわれだとも考えられる。

次に、子どもの変化について職員は、《他者への安心と信頼》、《外見と内面の変化》などにみられるととらえていた。《他者への安心と信頼》では、子どもに安心感、安全感、満足感につながる環境の保障や、主体性の保障などを職員が丁寧に行っているからこその変化だと考えられる。

次に、職員の「寄り添う支援」は、職員によって《あたたかみのある家庭的な支援》や《ありのままを受け入れる支援》だととらえられていた。これらの支援は、高橋（2012）の示す、興味関心事・やりたいことを保障する、安心できる生活環境を保障する支援と一致する。

次に、寄り添うとはなにかについて、《ありのままの理解》、《安心できる味方としての存在》では、職員の「寄り添う支援」にあげられた内容と類似した。このことから寄り添ううえで共通する概念であることが考えられる。以上により、職員は子どもの特徴と変化を丁寧にとらえており、村井・小林（2002）が示す、子どもの深刻な心の傷と自尊心の回復に大きく寄り添っているものと考えられる。また、虐待を受けた子どもに「寄り添う支援」の構成内容および定義は、子どもを支援する上で重要な知見を得られたものと考えられる。

研究 2

本研究では、研究1で作成した「自立援助ホーム職員の被虐待児に対する寄り添い尺度」の項目原案をもとに質問紙調査を行い、因子分析を通じて尺度の信頼性を検討することを目的とした。

方法

調査協力者

全国141ヶ所の自立援助ホームに在籍する20歳以上の常勤および非常勤職員、子どもと関わるボランティアを含めたスタッフ、計152名のうち、無回答1名を除く計151名を対象とした。なお、平均年齢およびSDは、無回答4名を除く147名で処理をした。調査協力者の概要はTable 7の示す通りであった。

調査時期および調査手続き

2017年10月に、インターネット調査法および集合調査法を併用して質問紙調査を行った。インターネット調査法では、Google フォームにて回答を求めた。なお、特性上、連絡先を秘匿としている自立援助ホームに配慮し、調査対象者の募集と告知は全国自立援助ホーム協議会を通じて、メールによる一斉配信を行った。集合調査法では、協議会会場において、参加者用

Table 7
調査協力者の概要

| | | N | % |
|---|-----------------------------|-----|------|
| 性 別 | 男性 | 70 | 46.4 |
| | 女性 | 81 | 53.6 |
| 年 齢 Mean (± SD) = 44.2 (± 13.5) | 20歳代 | 24 | 15.9 |
| | 30歳代 | 38 | 25.2 |
| | 40歳代 | 32 | 21.2 |
| | 50歳代 | 24 | 15.9 |
| | 60歳代 | 27 | 17.9 |
| | 70歳以上 | 2 | 1.3 |
| | 不明 | 4 | 2.6 |
| 勤続年数 Mean (± SD) = 5.4 (± 4.6) | 1年未満 | 27 | 17.9 |
| | 1年以上3年未満 | 40 | 26.5 |
| | 3年以上5年未満 | 28 | 18.5 |
| | 5年以上10年未満 | 37 | 24.5 |
| | 10年以上15年未満 | 11 | 7.3 |
| | 15年以上20年未満 | 6 | 4.0 |
| | 20年以上 | 2 | 1.3 |
| 勤務形態 | 常勤職員 | 128 | 84.8 |
| | 非常勤職員 | 23 | 15.2 |
| 役 職 | ホーム長または準ずる役職 (直接処遇を伴う) | 57 | 37.7 |
| | ホーム長または準ずる役職 (直接処遇を伴わない) | 6 | 4.0 |
| | 直接処遇職員 | 81 | 53.6 |
| | その他 | 7 | 4.6 |
| 保有資格 (複数回答) | 児童指導員 | 55 | 36.4 |
| | 保育士 | 37 | 24.5 |
| | 教員免許 | 41 | 27.2 |
| | 社会福祉士 | 17 | 11.3 |
| | 社会福祉主事 | 44 | 29.1 |
| | 精神保健福祉士 | 6 | 4.0 |
| | 介護福祉士 | 12 | 7.9 |
| | 臨床心理士 | 3 | 2.0 |
| | その他の心理士資格 | 9 | 6.0 |
| | 特に資格はない | 14 | 9.3 |
| | その他 | 24 | 15.9 |

配布資料に質問紙を同封することで配布を行った。回収方法は、受付に施錠できるポストを設置し、大会開催期間内に行った。

調査内容

自立援助ホーム職員の被虐待児に対する寄り添い尺度 研究1をもとに作成された尺度である。本尺度は、自立援助ホーム職員およびスタッフが、虐待を受けた子どもに「寄り添う支援」をするうえでの心構えや態度を測る38項目から構成された。質問項目の指示文は「自立援助ホームにおける虐待を受けたお子さん（以下、子ども）に『寄り添う支援』についておたずねします。以下の質問項目が、子どもに『寄り添う支援』をするうえで自分にどのくらいあてはまるか、1～5の選択肢よりお答えください」とした。

質問項目に対する回答様式は、「1. まったくあては

まらない」,「2. あまりあてはまらない」,「3. どちらともいえない」,「4. 少しあてはまる」,「5. よくあてはまる」の5件法とした。

分析方法

回答の結果から、尺度項目の決定および「寄り添う支援」の具体的な内容と因子構造を明らかにするため、探索的因子分析を行った。その後、作成した尺度の信頼性を検討するため、下位尺度ごとに Cronbach の α 係数を算出した (Table 8)。

Table 8
自立支援ホーム職員の被虐待児に対する寄り添い尺度の因子分析結果

| 項 目 | 因 子 | | | |
|--|------|------|------|------|
| | F1 | F2 | F3 | F4 |
| F1 : 見つけてかたちづくる ($\alpha = .84$) | | | | |
| 24. 子どもの言葉にならない気持ちをうまく言語化できるように手伝う | .77 | -.18 | .11 | -.09 |
| 20. 子どもの育ってきた環境を把握しようとする | .67 | -.13 | -.24 | .31 |
| 29. 子どもに「こんな見方もあるよ」と新しい視点を伝える | .53 | .11 | .04 | -.03 |
| 21. 子どもの変化 (表情, 言葉, 外見など) を見逃さないようにする | .52 | .11 | -.08 | .21 |
| 35. 子どものいいところを見つけて自尊心を育てるように関わる | .45 | .13 | .17 | .13 |
| 34. 子どもの感情的なふるまいに巻き込まれないようにする | .44 | .16 | .06 | -.01 |
| 37. よく話し合い, 課題があれば一緒に解決策を見出すようにする | .43 | .26 | .06 | .13 |
| 19. 子どもの「話したい」という気持ちを見逃さないようにする | .43 | .21 | .19 | -.13 |
| 28. 子どもに対して「ごめんね」と謝ることができる | .40 | .22 | .12 | -.17 |
| F2 : 気持ちと時間の共有 ($\alpha = .75$) | | | | |
| 30. 子どもが好きなことで楽しめる時間を一緒に共有する | -.22 | .73 | .11 | -.01 |
| 27. 子どもだけでなく子どもがつくる新しい家族 (本人の子どもやパートナー) も含めて見守っていく | -.03 | .70 | -.06 | .10 |
| 32. 子どもの感情 (喜び, 悲しみ, 怒りなど) を子どもと一緒に分かち合う | .17 | .51 | .08 | -.12 |
| 25. 個人だけではなくチームで子どもを支援する | .08 | .51 | -.23 | .07 |
| 31. 退居後も子どもが望む限り支援を継続していく | .08 | .44 | .10 | .02 |
| 38. 日々, あたりまえのように子どものそばにいる | .23 | .42 | -.01 | -.06 |
| F3 : 子どもの気づきを支える ($\alpha = .72$) | | | | |
| 15. 子どもが気づくまで待つ | .11 | -.11 | .65 | .03 |
| 9. 子どもの意思決定を尊重する | .11 | .07 | .55 | .02 |
| 8. アドバイスを求められたら, 子どもが自分で考えて気づくように関わる | .16 | .09 | .51 | .03 |
| 18. 子どもがたとえ失敗するとわかっているにもかかわらずにやらせてみる | .12 | -.06 | .45 | .18 |
| 7. 子どもが失敗しても何度でもゆるし支え続ける | -.10 | .01 | .43 | .19 |
| F4 : 味方としての子ども理解 ($\alpha = .75$) | | | | |
| 1. 子どもをありのまま受け入れる強い意思がある | -.24 | -.03 | .34 | .62 |
| 3. 子どもの言動を子どもの立場から理解しようとする | .18 | -.16 | .16 | .57 |
| 4. 子どもを信じてあきらめない | -.22 | .09 | .36 | .49 |
| 10. 子どもの特性をできるだけ理解する | .32 | -.08 | .10 | .49 |
| 12. 子どもにとって常に味方であり安心できる存在でいる | -.01 | .19 | .07 | .46 |
| 26. 子どもに正しい生活習慣が身につく環境を提供する | .06 | .37 | -.27 | .39 |
| 因子間相関 | F1 | .62 | .36 | .45 |
| | F2 | | .35 | .39 |
| | F3 | | | .32 |

倫理的配慮

本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2017-052）。なお、質問紙調査の際、フェイスシートおよびメール、Google フォームにて、本研究の目的、倫理的配慮、データの取扱いなどの注意事項を記載し、同意を確認したのちに回答を求めた。

結 果

自立援助ホーム職員の被虐待児に対する寄り添い尺度の因子分析 原案 38 項目において、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量 .40 未満となる項目および多重負荷（因子負荷量 .40 を基準として）のかかった 12 項目を削除した。その際、質問項目 12: 子どもにとって常に味方であり安心できる存在であるは、「寄り添う支援」において重要な臨床的意義を持つ項目であると判断して残すこととした。理由として、基準を下回るものの因子負荷量 .35 という一定の値を示していること、削除項目に加えることにより最終的な因子分析の項目数が 21 項目まで減少することを考慮した。

残った原案 26 項目において、主因子法・プロマックス回転による 2 度目の因子分析を行った。その結果、質問項目 28: 子どもに対して「ごめんね」と謝ることができる、質問項目 26: 子どもに正しい生活習慣が身につく環境を提供する、については、因子負荷量 .39 と基準をわずかに下回るものの残す項目とした。理由として、質問項目 28 を削除することにより第 1 因子における Cronbach の α 係数が、 $\alpha = .84$ から $\alpha = .83$ に下がること、質問項目 26 を削除することにより最終的な因子分析の質問項目数が 17 項目まで減少することを考慮した。2 度目の因子分析を終えた時点で削除すべき項目はなかった。最終的に、自立援助ホーム職員の虐待を受けた子どもに「寄り添う支援」に関する 26 項目について因子分析を行った結果、解釈可能性から 4 因子を抽出した。

第 1 因子において負荷量の高い項目は、「子どもの言葉にならない気持ちをうまく言語化できるように手伝う」、「子どもの育ってきた環境を把握しようとする」などの順に 9 項目抽出された。よって、項目の意味を重視し、「見つけてかたちづくる」と命名した。

第 2 因子において負荷量の高い項目は、「子どもが好きなことで楽しめる時間を一緒に共有する」、「子どもだけでなく子どもがつくる新しい家族（本人の子どもやパートナー）も含めて見守っていく」などの順に 6 項目に抽出された。よって、項目の意味を重視し、「気持ちと時間の共有」と命名した。

第 3 因子において負荷量の高い項目は、「子どもが気づくまで待つ」、「子どもの意思決定を尊重する」などの順に 5 項目抽出された。よって、項目の意味を重

視し、「子どもの気づきを支える」と命名した。

第 4 因子において負荷量の高い項目は、「子どもをありのまま受け入れる強い意思がある」、「子どもの言動を子どもの立場から理解しようとする」などの順に 6 項目に抽出された。よって、項目の意味を重視し、「味方としての子ども理解」と命名した。

以上の解釈から、「自立援助ホーム職員の被虐待児に対する寄り添い尺度」は、「見つけてかたちづくる」、「気持ちと時間の共有」、「子どもの気づきを支える」、「味方としての子ども理解」という 4 つの因子から構成されていることが明らかになった。

信頼性の検討 「自立援助ホーム職員の被虐待児に対する寄り添い尺度」の 26 項目および 4 下位因子について Cronbach の α 係数を求めた結果、概ね十分な内部一貫性が確認された。

性差の検討 性差を検討するため、抽出された各因子の得点に対して男女間で独立したサンプルの t 検定を行った。その結果、第 1 因子「見つけてかたちづくる」は、 $t(149) = 2.31, p < .05$ となり、第 1 因子のみ 5% 水準で有意な差がみられ、男性の得点が高かった。

勤続年数の差による検討 勤続年数の差を検討するため、実態調査（全国自立援助ホーム協議会、2016）を参考に 1 群を 3 年未満、2 群を 3 年以上 10 年未満、3 群を 10 年以上の 3 群に分け、抽出された各因子の得点に対して一元配置分散分析を行った。結果、第 1 因子「見つけてかたちづくる」は、 $F(2,148) = 3.35, p < .05$ 、第 2 因子「気持ちと時間の共有」は、 $F(2,148) = 7.21, p < .001$ 、第 3 因子「子どもの気づきを支える」は、 $F(2,148) = 4.24, p < .05$ 、第 4 因子「味方としての子ども理解」は、 $F(2,148) = 1.25, n.s.$ となった。

その後、Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、第 1 因子では、勤続年数 10 年以上と 3 年未満の間の差が 5% 水準で有意であった。第 2 因子では、勤続年数 10 年以上と 3 年未満の間の差、3 年以上 10 年未満と 3 年未満の間の差がそれぞれ 5% 水準で有意であった。第 3 因子では、勤続年数 10 年以上と 3 年未満の間の差が 5% 水準で有意であった。この結果より、勤続年数 10 年以上は、第 1 因子「見つけてかたちづくる」では 3 年未満、第 2 因子「気持ちと時間の共有」では 3 年未満と 3 年以上 10 年未満、第 3 因子「子どもの気づきを支える」では 3 年未満よりも得点が高く、勤続年数 3 年以上 10 年未満は第 2 因子では 3 年未満よりも得点が高く、勤続年数 3 年未満の得点は第 1 因子、第 2 因子、第 3 因子すべての得点をもっとも低いことが示された。

考 察

本研究の目的は、探索的因子分析を通じて尺度の信頼性を検討することであった。結果から、青年期前期

の虐待を受けた子どもに「寄り添う支援」の4因子が抽出され、概ね十分な内部一貫性が認められた。

第1因子「子どもの言葉にならない気持ちをうまく言語化できるように手伝う」という項目は、言語理解が低く、伝える能力も低い子どもが自立援助ホームに数多く存在しているという高橋（2013）の主張とも一致する。

第2因子「子どもが好きなことで楽しめる時間を一緒に共有する」という項目からは、高橋（2012）が述べる、興味関心事・やりたいことを保障し、気持ちと時間を共有していくことが「寄り添う支援」に含まれる可能性が示唆されたと考えられる。

第3因子「子どもが気づくまで待つ」といった項目は、村井・小林（2002）の示す子どもの主体性の保障に該当し、職員には「待つ支援」が必要だと考えられる。

第4因子「子どもをありのまま受け入れる強い意思がある」といった項目は、村井・小林（2002）の主張する、子どもたちの抱えている困難、気持ち、価値観をありのまま受けとめ子どもたちに寄り添う支援と一致することが考えられる。

次に、職員による勤続年数の差について考察する。分析の結果、勤続年数10年以上の職員は、勤続年数3年未満の職員と比べて得点が第4因子以外すべて高かった。よって、虐待を受けた子どもに「寄り添う支援」をするうえで、職員の年齢よりも勤続年数、すなわち子どもとの時間や経験の多さが影響する可能性が考えられる。また、経験の中で自己効力感ややりがいを持続されることも、長年にわたる勤続の要因と考えられる。

総合考察

本研究の目的は、自立援助ホーム職員の支援の基本である寄り添いに着目し、入所者の多くを占める虐待を受けた青年期前期の子どもに寄り添うとはなにかを明らかにすることであった。

研究1では、自立援助ホーム職員の虐待を受けた子どもに「寄り添う支援」の構成要素を明らかにするために探索的な調査を行い、尺度の項目原案を作成した。作成された項目原案38項目から構成される「被虐待児に対する自立援助ホーム職員の寄り添い尺度」を開発した。また、職員の「寄り添う支援」や、寄り添うとはなにかに関する自由記述質問より抽出した内容から「寄り添う支援」を「あたたかみのある家庭的な関わりの中で子どもをありのまま理解し、安心できる味方として存在しながら必要な支援をし続けること」と定義した。

研究2では、探索的因子分析を通じて尺度の因子構造を検討した。結果、4因子26項目から構成されることが明らかとなった。尺度項目には、受容、傾聴、

共感の概念ともとれる項目が見受けられたが、「寄り添う支援」とは、子どもの抱える表現しづらいなにかを「見つけてかたちづくる」、「気持ちと時間の共有」、「子どもの気づきを支える」、「味方としての子ども理解」といった、多様さを包括した概念であると考えられる。また、本研究を通じて得られた結果は、「寄り添う支援」を行ううえで有用な資料となることが考えられる。

今後の課題と展望

本研究の今後の課題について以下に述べる。第1に、本研究では調査対象者の人数が母数からの割合としては多いものの、因子分析で十分な結果を得るにはサンプルサイズが151名と少ないことが考えられる。

第2に、尺度の評定方法の課題があげられる。虐待を受けた「寄り添う支援」における心構えや態度を測るうえで、そのように行動したいという思いなのか、実際に実行している行動なのか、教示が明確でなかったことが考えられる。

第3に、本研究における妥当性の検討は、尺度項目原案を作成する際、専門家による内容的妥当性の検討のみであった。理由として、「寄り添う支援」の概念は多岐にわたっていることから、構成概念妥当性を担保する尺度について精査不足であったことがあげられる。よって、的確な構成概念妥当性尺度の精査が求められる。

第4に、本研究における調査協力者は、寄り添う支援を行う側の職員を対象としている。一方で、職員が寄り添う対象である、虐待を受けた子どもの体験を尺度の内容に反映できればより良い尺度になることが考えられる。

次に、今後の展望について以下に述べる。当面、上記で述べた課題を達成し、尺度の完成を目指すことが重要な目標となる。現段階における本研究の限界は、自立援助ホームといった施設の限定や、子どもの発達段階が絞られているため、尺度の汎用性が限られていることである。今後の尺度開発研究の過程によって、15歳以上の高齢児童を対象とする社会的養護の分野に広く貢献する知見を見出せる可能性が期待される。

引用文献

- 川喜田 二郎 (1967). 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- 厚生労働省 (2015a). 自立援助ホーム運営指針 厚生労働省 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukat-eikyoku/0000083336.pdf> (2019年7月31日)
- 厚生労働省 (2015b). 児童養護施設入所児童等調査 厚生労働省 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou->

- 11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Kateifukushika/0000071184.pdf (2019 年 7 月 31 日)
- 増沢 高 (2009). 虐待を受けた子どもの回復と育ちを支える援助 福村出版
- 村井 美紀・小林 英義 (編) (2002). 虐待を受けた子どもへの自立支援——福祉実践からの提言——中央法規出版
- 高橋 亜美 (2010). 自立援助ホームから見た子どもの虐待, 虐待を受けた子どもの支援とは——自立援助ホームあすなろ荘の取り組みから—— 福祉労働, 128, 38-46.
- 高橋 亜美・早川 悟司・大森 信也 (2015). 施設で育った子どもの自立支援 明石書店
- 高橋 智 (2013). 発達障害の視点から見た非行少年の自立支援に関する研究——児童自立支援施設・少年院・自立援助ホーム等の調査を中心に—— 東京学芸大学連合学校教育学研究科 平成 24 年度広域科学教科教育学研究経費 研究成果報告書
- 八木 修司・岡本 正子 (編) (2012). 性的虐待を受けた子ども・性的問題行動を示す子どもへの支援——児童福祉施設における生活支援と心理・医療的ケア—— 明石書店
- 全国自立援助ホーム協議会 (2016). 2015 年度全国自立援助ホーム実態調査報告書 全国自立援助ホーム協議会
- 自立援助ホームハンドブック製作実行委員会 (編) (2013). 自立援助ホームハンドブックさぼと Guide < 実践編 > 全国自立援助ホーム協議会